

恭介はぐっと腰に力をこめて、なかに押しこんだ。みりつとなにかが開く感触がして、徐々に、少しずつ、なかに埋まっていく。

冬香は唇を噛みしめ、破瓜<sup>はか</sup>の痛みに耐えている。

「くっ……、んっ……、ふっ！」

シーツをくつと握りしめ、自分を受け入れようとしている少女の姿は、このうえもなく愛らしかった。

がりつとなにかを強く押し分ける感触が、なかからして、恭介の肉棒が半分ぐらい押しこまれた。

「かはっ！」

冬香の口が開き、激痛の叫びをもらす。目の端から涙が一筋溢れ、こめかみを伝う。冬香は目をつむると、恭介の体にしがみついていた。

「痛い……、痛いよ……、お兄ちゃん、痛い……」

顔を苦痛に歪め、冬香は呻<sup>うめ</sup>いた。

苦痛に顔を歪める端整な冬香の顔が、恭介を現実に戻しそうになる。

子供の頃の冬香の顔が、ありありと浮かんできて、自分がしている行為がなんとも許せないものに見える。



恭介は腰の動きをとめて、じっと冬香を見つめた。

冬香はそんな兄の気持ちに気づいたのだろうか、目を開けて恭介の顔を見つめた。

「……やめちゃうの？」

「だって、お前が痛がるから……、なんか可哀相だよ」

冬香は恭介にキスをした。ゆっくり唇を離れたあと、

「ごめんね。痛がつて……、でも、やめないで。痛いのより、お兄ちゃんと一つになれないことのほうがいやだから」

と言つて、ぎゅつと強く恭介を抱きしめた。

その言葉で、恭介のなかでくすぶっていた罪悪感の塊かたまりが消えた。

「わかった」と呟いて、冬香のなかで動きはじめた。

「く……、ん……、あ……」

動くほどになから潤滑油が溢れ、恭介の抽送を滑らかにしていく。

恭介は徐々に深く、一ミリずつ、冬香のなかに埋めていった。

「ふあ……、あ……、お、お兄ちゃん……」

冬香は震えながら、固く、強く抱きしめてくる。

「わかるか？ 今、奥まで入ってるぞ」

「うん……、奥に、奥に当たってるよ……」

冬香のなかはとろけそうだった。こんな感触は初めてだった。

恭介はゆつくりと動きながら呟いた。

「あは、遺伝子が同じだからかな……」

「い、遺伝子？」

冬香が尋ねかえす。

「うん……。まるで、胎内のなかで泳いでる、みたいだ」

「なにそれ……」

冬香は微笑んだ。

冬香のなかが締めつけを増してくる。細い冬香の膣は、こわばりから柔肉へと変化していき、恭介の勃起を優しく包みこみはじめた。

「あ……、ん……、ふあ……」

冬香の吐息が、甘いものになっていく。時折り思いだしたように目を開き、

「気持ちいい？」

と恭介に尋ねる。

「気持ちいいよ」

恭介が答えると、嬉しいと言って、冬香はそのたびに恭介の唇を吸う。

「い、今まで付き合った女の人より、き、気持ちいい？」

わななく唇で、冬香が問うてくる。

恭介は腰を動かしながら、荒い息で答える。

「気持ちいいよ」

「ふ、冬香が一番？」

冬香は潤んだ目で、問いかけてくる。

「冬香が一番だよ」

それから冬香は目をつむると、顎を上に向けた。冬香のなかで、ぴくつ、ぴくつと軽い痙攣けいれんをはじめた。

「あ、愛してる？」

冬香の腰が小刻みに動いている。絶頂さいとに近いことを悟った恭介は、ゆっくりとほじるように動いて、冬香の快感をさらに高めようとした。

「愛してる」

冬香は、くっ！と唇を噛みしめると、恭介に抱きついてきた。

「こ、声出ちゃう。出してもいい？こ、こ、声、あげてもいい？」